

二月のテーマ

まず自分から



え・城谷俊也

「歌の力」が 学校を変えた

昨今の卒業式では、「仰げば尊
し」「贈る言葉」「巣立ちの

歌」等に代わり、「旅立ちの日に」という歌が多く歌われています。保護者や関係者として卒業式に参加するなどして、耳にしたことがある方も多いでしょう。

「白い光の中に 山なみは萌えて」という一節から始まるこの歌は、一九九一年に、埼玉県秩父市立影森中学校の教員によって作られた合唱曲です。

今や全国の学校の約六割で歌われているともいわれる卒業式の新しい定番曲は、どのように誕生したのでしょうか。二〇〇五年に出版された書籍『旅立ちの日に』の奇蹟』から紹介します。

*

一九八八年、影森中学校に小嶋登校長が赴任しました。当時は生徒の半分ほどしか校歌を歌わず、新任校長の耳には、ほとんど声が聞こえてこなかったといえます。

小嶋校長は赴任の挨拶で「歌声の響く学校を目指そう」と述べ、合唱の機会を増やしていきました。

先生たちの中でも、特に協力的で熱心だったのが、音楽科教諭の坂本浩美先生でした。

最初は抵抗があったものの、小嶋校長と坂本先生を中心に、粘り強く努力を続けた結果、生徒たちは歌う楽しさに気づくようになりました。やがて校内の雰囲気も明るくなっていったのです。

一九九一年、坂本先生は「歌声の響く学校づくり」の集大成として「卒業する生徒たちのために、記念になるものを残したい！」との思いから、小嶋校長に作詞を依頼しました。小嶋校長は、未来へ旅立つ生徒たちへの「贈る言葉」として詞を綴り、坂本先生が曲をつけました。そして、完成した歌「旅立ちの日に」は、「三年生を送る会」でのサプライズとして初めて披露されたのです。

その後、周りの学校にもこの歌が広まり、都内の音楽教諭だった松井孝夫氏が混声三部合唱への編曲を行いました。これが雑誌『教育音楽』に取り上げられ、全国で歌われるようになったのです。

学校や企業などの集団において、トップの信念と熱意は、全体を動かす原動力となります。前述の例でいえば、歌の力を信じ、「歌は人の心を変える」という強い信念のもと、小嶋校長は学校改革を成し遂げました。その信念に共感し、協力者となったのが坂本先生でした。影森中学校の卒業生たちは、坂本先生の印象について、口を揃えて「熱い先生だった」と振り返ります。

会社の変革も「会社を良くしたい！」「社員を幸せにしたい！」という経営者の熱い思いなくしては始まらないでしょう。

純粋倫理の学びでは、社員を変えようとするのではなく、自ら変わるこの大切さを説いています。そのスタートは、経営者自身の強い信念です。

信念あるところに、経営者の自己変革が促され、良き協力者が現われて、その熱が会社全体に、やがて地域へと広がっていくのです。

*本文参考図書『旅立ちの日に』の奇蹟』（ダイヤモンド社）